

「どうして信仰がないのか」

マルコによる福音書 4 章 35 - 41 節

森島 牧人 牧師

復活節第二主日の今日、与えられた御言葉はマルコ 4 章の中の「突風を静める」という小見出しのあるところです。

「その日の夕方になって、イエスは『向こう岸に渡ろう』と弟子たちに言われた。」(マルコ 4 : 35) という記述から出来事は始まります。「夕方になって」とありますから、程なく夜になるという頃に舟を出すことへの戸惑いが、この時の弟子たちにあったと想像出来ます。弟子たちの中には漁師が 4 人いて、夜の湖の怖さを熟知していたに違いないからです。それでも主に従って舟を出したということは、彼らなりに決意は持っていたということでしょう。ルカ 5 : 5 によく似た場面<漁師のシモンが無駄だと思いながら、主イエスに従って湖に網を降ろす>があります。主イエスに対する信頼から生まれた決断と行動という点では共通していますが、大漁を見て悔い改めるシモンなどと、異なっている点もあります。

さて、舟が岸を離れて湖の真ん中あたりを過ぎる頃だったのでしょうか。聖書には「激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、『先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか』と言った。」(同 4 : 38) と記されています。経験者としてこれから起こることを予測出来た弟子たちにとって、何にもおっしゃらずに眠っておられる主イエスは、十分に弟子たちの苛立ちの対象であったと思います。これは、嵐を支配される主と、嵐に支配される弟子たちという立場の違いによるものだったのですが、「主イエスの湖への無知」との思いもあった弟子たちには、この主イエスの沈黙を「無神経」と考えたのでした。しかし、弟子たちに無神経に見えたこの時の主イエスの在り方は、舟の上という<運命共同体>の中にあるもので、自分だけは安全な別というものとは、全く違っていたのです。

「私たちがおぼれてもいいのですか」と主イエスをなじる弟子たちに、「イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、『黙れ。静まれ』と言われた。すると、風はやみ、すっかり風になった。」(同 4 : 39) と聖書は続きます。そして「イエスは言われた。『なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。』と。弟子たちは恐れて、『・・・この方はどなたなのだろう』と互いに言った。」(同 4 : 40 - 41) で、この出来事の記述は結ばれています。嵐の中で弟子たちは、主イエスが共にいてくださるという現実を見落とし、主イエスの神への信頼を我がものとする事が出来ず、悪霊に屈したのでした。

この舟と同じように、主イエスの体なる教会も主と共にある運命共同体です。その教会生活が習慣化していないか、主と共にあるという内から湧き上がる喜びが失われていないか、常に気を付ける必要があります。そして「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」との主の問い。「信仰があるのか」と主が問い質しておられることを、私たちは知らなければなりません。さらに、迫害の中の初代教会を支え、励ましたであろうこの出来事を通して私たちが知らされること、それは「自身の信仰の無さをわきまえずに主をなじるような者をもなお、主イエスは叱り、支えて、御手の中に入れてくださる」ということです。私たちをお見捨てになれない主の姿、そこにこそ主イエス・キリストの愛はあります。